



### 「平和があるように」

いずみブロック  
ジュアン ロムアルドウス 神父

聖霊降臨のヨハネによる福音書20章 19-23節は、復活したイエスが、悲しみと恐れに満ちた弟子たちの前に姿を現します。“平和があるように”と、彼らの悲しみは喜びに変わり、恐怖は消え去ります。神の存在が、弟子たちを強くし、自信を持たせて、旅立たせているのです。

わたしたちの旅を振り返ると、神の存在を無視したときに、恐れ、悲しみ、虚栄心、虚無感、心の硬さに遭遇したことに気づきます。わたしたちの人生に主が来てくださると、あるいは心に聖霊が来てくださることを認め、招き続けていきましょう！しかし、私たちの心の中だけでなく、今の社会にも聖霊降臨が必要です。ペンテコステは、平和と愛と一致の注ぎでした。暴力、殺戮、恐怖、憎悪の代わりに、イエスの教えに立脚した真の永続的な平和のために、私たち全員が働けますように。

主の平和の挨拶に続いて、主の赦しのメッセージがあることを忘れないようにしましょう：「あなたが許す者の罪は赦され、あなたが留める者の罪は留め置かれる。」つまり、相手を赦さないと真の平和はありえないのです。私たちが真の平和へと導くのは、和解の道なのです。もし、あなたが今、平和を感じていないとしたら、それは、神との関係、人との関係、自分自身との関係が平和でないのかもしれませんが、平和があなたとともにありますように！

### “May there be peace”

The Gospel of the Pentecost mass (Jn. 20, 19-23) presents us about the Risen Lord appeared to His disciples who are filled with sadness and fear, saying, “Peace be with you.” In that moment, their sadness turns to joy, and their fears vanish. It is the presence of God that helps them to become strong and confident as they journey on. As we look back on our journey in life, we realize that when we disregarded God’s presence in our lives, we encountered fear, sadness, vanity, emptiness, and hardness of heart. Let us continue to acknowledge and invite the Lord to come into your life and the Holy Spirit to come into your heart! Not just in our heart, but we need the Pentecost in our daily life, environments as well. Pentecost was an outpouring of peace, love and unity. Instead of violence, killings, fear and hate, may we all work for true and lasting peace, which is founded on Jesus’ teachings. Let’s remember that the Lord’s greeting of peace is followed by His message of forgiveness: “Whose sins you forgive are forgiven them, and whose sins you retain are retained.” In other words, there can be no true peace without forgiveness. It is the road of reconciliation that leads us to true peace. If you are not experiencing peace right now, it could be that you are not at peace with God, with other people, or with your own self. Peace be with you!



教皇フランシスコメッセージ  
「コロナの世界を生きる」抜粋（13）  
第三部 行動するとき（1）



危機と試練のとき、私たちの凝り固まった習慣は揺さぶられます。そしてそのときにこそ、神の愛は私たちが浄化し、私たちが神の民であることを思い出させるために表に現れます。神との親密な関係が、私たちが結びつけます。行動が求められている今こそ、

私たちは民の一員である自覚を取り戻さなくてはなりません。民になるとは、どういうことでしょうか？それは幻想や寓話ではなく、普遍的な真実を、目に見え、実体があるものにするために、具体的な物語を描くことです。民は伝統的に、歴史、言語、文化（特に音楽とダンス）などで結びついていますが、特に顕著なのが共有された知恵と記憶です。民は、歴史や習慣、そして（宗教的なものであろうとなくろうと）儀式など、理屈を超えた結びつきの中で尊ばれてきた記憶によって一つになるのです。全ての民の物語は、尊厳と自由の探求から始まります。それは、連帯と苦闘の歴史です。しかし、闘争や、戦争や苦難のときに認識した共通の尊厳は、簡単に忘れられてしまいます。平和と繁栄の中、民は自らの歴史を忘れ、自分たちを結びつける理念をもたない烏合の衆に成り下がってしまう危険性があるのです。そうすると、世の中は片隅の人々を犠牲にして存在することになります。民は分裂して競い合い、搾取され貶められた人々はその不当さに怒りを燃やします。そして私たちは、自らが民の一人であるということをおぼえて互いに張り合い、対偶を対立に変えてしまいます。なぜなら、こうした状況では、民はもはや自然界を、育み受け継いでいくべきものと捉えなくなるからです。彼らはそこから奪うばかりで、何も戻そうとはしません。社会には無関心、エゴイズム、独りよがりな幸福、深い断絶がはびこり、それは暴力となって現れます。これらは皆、民が自らの尊厳を失い、信じることをやめたことのしるしです。しかし時として、大いなる厄災が自由と連帯の記憶を呼び覚ますことがあります。

こうした苦難により、民は記憶を取り戻し、その結果、希望をもって行動する力を取り戻すことができます。神の民は圧倒的な力になす術もなく翻弄されるのではなく、行動する力をもつ存在であることを危機は明らかにするのです。苦難は、私たちの弱さを剥き出しにし、私たちの計画やルーティンや優先順位の基盤となっている、表層的かつ偽りの安全を露わにします。私たちがコミュニティを育むことを蔑ろにし、無関心という幻想の中に閉じこもっていることが白日の下に晒されます。

そして私たちは、狂騒的な忙しさの中で新しいものを追い求めるうちに、周囲の苦しみへの配慮を忘れていたことに気づくのです。そして、その苦しみにどう対応するかで、神の民の本質が試されます。

民の尊厳に関する記憶を取り戻せば、実利主義の不十分さがわかります。私たちは、社会は各々が自分の利益を追求する個人の集合体に過ぎず、民の団結などおとぎ話であると教えられてきました。私たちが、市場や国家の権力の前には無力で、人生の目的は利益と力だと信じてきたのです。

しかし嵐に襲われた今、私たちはそれが間違いだということに気づきました。この気づきの瞬間を、やり過ごしてはなりません。コロナ禍の対応において、民の尊厳と記憶とルーツを回復することに失敗したと、この先ずっと言われるようなことがあってはならないのです。

Pope Francis Message  
Excerpt from “Living in the World of Corona” (13)

### Part 3: When to Act (1)

In times of crisis and trial, our hardened habits are shaken. And only then will God’s love come to the surface to purify us and remind us that we are His people. Our intimate relationship with God unites us. Now that action is required, we must regain our awareness of being part of the people.

What does it mean to be a citizen? It is not an illusion or an allegory, but a concrete story to make a universal truth visible and tangible. People are traditionally linked by history, language and culture (especially music and dance), but shared wisdom and memory are particularly prominent. People are united by memories that have been revered in history, customs, and rituals (religious or not) that transcend logic.

The story of all peoples begins with the search for dignity and freedom. It is a history of solidarity and struggle. But the common dignity we recognize in times of struggle, war and tribulation is easily forgotten. In the midst of peace and prosperity, there is a danger that the people will forget their history and become a group of crows that have no idea to unite them. In that case, the world will exist at the expense of the people in the corner. The people are divided and compete with each other, and the exploited and degraded are angered by their injustice. And we compete with each other, forgetting that we are one of the people, turning opposites into conflicts. This is because, in such a situation, people no longer see the natural world as something that should be nurtured and inherited. They just take away from there and don't try to give anything back. Society is infested with apathy, egoism, self-righteous happiness, and deep disconnection, which manifests itself in violence. These are all signs that the people have lost their dignity and stopped believing. But sometimes great calamities awaken memories of freedom and solidarity.

Through these hardships, the people can regain their memories and, as a result, the strength to act with hope. The crisis reveals that God's people are not at the mercy of overwhelming power, but have the power to act. Suffering exposes our weaknesses and the superficial and false security on which our plans, routines and priorities are based. It exposes us to neglect fostering community and to be trapped in the illusion of indifference. And in our frenzied busyness and pursuit of new things, we realize that we have forgotten to consider the suffering of those around us. And how we respond to that suffering will test the true nature of God's people.

If we regain the memory of the dignity of our people, we will see the inadequacy of pragmatism. We have been taught that society is nothing more than a collection of individuals, each pursuing its own interests, and that the unity of the people is a fairy tale. We are powerless before the power of the market and the state, and we have believed that the purpose of life is profit and power.

But now that the storm has hit, we realize we were wrong. Don't let this moment of awareness slip away. We must not be told forever that we have failed to restore the dignity, memory and roots of our people in our response to the pandemic.

(この英訳はワードの翻訳機能を使っています)

5月14日(日)ミサ後に和泉教会の信徒総会が行われました。

最初に評議会会長の古木さんより挨拶があり、引き続き、2022年度財務報告と2023年度予算について、財務委員会の福田さんより説明がありました。そのあと各委員会より委員会の活動内容の説明がありました。詳細は資料をご覧ください。また、3役が改選されましたので、旧三役の挨拶と新三役の紹介がありました。

新三役は 会長 渡辺 直彦  
副会長 ロッチ・ヴァチカン・ダンカル  
副会長 北濱 直子

各員会では一緒に活動をしていただける方を募っています、どんな小さな事でもできる範囲でお手伝いしていただけるとよろこびます、教会を作っているのは信徒の皆さん一人一人です、ともに祈り、喜び、悲しみを分かち合える和泉教会を作っていきます。

旧三役の古木さん、小野田さん、レイシエルさんお疲れさまでした、今後も教会の活動のお手伝いをお願いいたします。

6月主日ミサ予定	浜寺 9時30分	和泉 9時30分	岸和田 9時30分
4日 ✦三位一体の主日	ロペス	村田 評議会：ジュアン	ジュアン
11日 ✦キリストの聖体	ジュアン評議会 11:00ポルトガ語イボルト	ロペス	村田 評議会
18日 年間第11主日	村田	ジュアン 11:00英語ジュアン	ロペス
25日 年間第12主日	ジュアン	ロペス	村田 11:00英語村田



※講座「主日のミサの学び」・・・毎週土曜日 14時30分(Sr.ルイザ担当)

2日(金)初金ミサ・・・9:30～村田神父  
4日(日)評議会・・・信徒会館1F  
18日(日)父の日・・・ミサ中父の日のお祈り  
24日(土)夜ミサ・・・19:30～ジュアン神父



6月の典礼 奉仕当番	先 唱	朗 読	共同祈願
4日 ✦三位一体の主日	小野田 裕	レイシエル 瀬上 和昭	ロッチ 木村 副見
11日 ✦キリストの聖体	西川 保彦	古木弘子 五来 光政	渡辺ひろみ 小野田 裕
18日 年間第11主日	渡辺 直彦	中原ミヨ子 小野田 裕	西川愛日 西川保彦
25日 年間第12主日	五来 光政	勝田恵美子 堀川 康弘	中原ミヨ子 喜山章次郎

社会活動委員会よりお知らせ

海の日コンサートの開催予定について、

日時：7月16日(日)13:00～

場所：和泉教会聖堂

新型コロナのため中止していました海の日コンサートが帰ってきます、いっしょに楽しみましょう。

信仰養成委員会よりお知らせ

「キリスト教に興味をお持ちの方、学んでおられる方」へ

キリスト教入門講座

# いずみブロック「共に歩む旅」対面式で始まります。

3年間コロナのためオンラインで行ってきた「いずみブロック共に歩む旅」は対面式で行うことができるようになりました。また、お家でオンライン(zoom)での参加も可能です。ちょっとのぞいてみようと思われる方は各小教区の会長か信仰養成部員にお尋ねください。



日時：毎週火曜(初回は5月9日から)  
午後7時30分～9時まで  
場所：浜寺教会